

九州大学フランス語フランス文学研究会  
事務局連絡先：  
〒815-0041 福岡市南区野間 1-12-18-1304  
Tel. (092) 511-2528 / e-mail : zat02065<at>nifty.com

本会はその名称に「九州大学」を冠しながらも、大学間の垣根をこえた研究上のプラットフォームたらんと活動を続けています。会誌『ステラ』の最新号には次の方々からご寄稿をいただきました。

第44号の執筆者（掲載順・敬称略）

吉井 亮雄	九州大学名誉教授
小坂 美樹	大阪大学非常勤講師
学谷 亮	中央大学文学部准教授
中野 知律	一橋大学名誉教授
津森 圭一	新潟大学人文学部教授
池田 潤	白百合女子大学言語・文学研究センター客員所員
井口 容子	広島大学名誉教授
飯田 伸二	鹿児島国際大学大学院国際文化研究科教授
菅原 百合絵	京都大学人文科学研究所准教授
檜野 佳奈子	宇都宮大学国際学部准教授
足立 和彦	名城大学法学部教授
上杉 未央	東洋大学経営学部准教授
松尾 剛	立命館大学法学部教授
大木 勲	駒澤大学総合教育研究部講師
浅間 哲平	明治大学商学部講師

## 『ステラ』既刊号総目次

第44号(2025年12月)	執筆者	頁数
アンドレ・ジッドとスティーヴン・スペンダー	吉井亮雄	1-14
ジッドとふたりの外国人画家 ——イムレ・ペルリとジョヴァンニ・モルテーニ——	吉井亮雄	15-24
ジッドとリュシエ・ドラリュ=マルドリュス ——『背徳者』の評価をめぐって——	吉井亮雄	25-51
ジッド『サウル』における「女王」——その属性と存在意義——	小坂美樹	53-67
『書評』大出敦『余白の形而上学——ポール・クローデルと日本思想』	学谷亮	69-74
プルーストにおける「偶像崇拜」批判の起源	中野知律	75-107
プルーストと樹木	津森圭一	109-134
プルーストはサント=ブーヴの詩と小説をいかに読まなかったか	池田潤	135-151
フランス語の代名動詞と再帰構文の類型	井口容子	153-164
〈走り読み〉が開く読書教育	飯田伸二	165-179
笑うルソー、微笑むルソー ——ルソーの自伝作品における笑いの諸相——	菅原百合絵	181-205
ルイ・フィギエにおける天文学と夢想 ——フラマリオンへの言及とその意味——	楳野佳奈子	207-218
モーパッサン『水の上』、あるいは水の詩学	足立和彦	219-230
サン=ジョン・ペルス、根づいた彷徨い ——没後50周年記念国際シンポジウム報告——	上杉未央	231-236
言葉と絵画——ドリュ・ラ・ロシェル『わらの犬』を読む——	松尾剛	237-254
バタイユにおける火山のモチーフ	大木勲	255-269
La figure de l'amateur chez Robert de Montesquiou	TEPPEI ASAMA	271-285

第43号(2024年12月)	執筆者	頁数
ジッドの未完の戯曲『帰宅』——関連未刊資料と校訂版の提示——	吉井亮雄	1-42
ジッドとデュ・ボスの未刊書簡	吉井亮雄	43-58
中国人フランス文学者・盛澄華のジッド宛未刊書簡	吉井亮雄	59-92

ポール・クローデルの伊香保旅行——『峨眉山上の老人』を読むために——	学 谷 亮	93-115
『百扇帖』における〈バラ〉と〈牡丹〉——クローデルの〈俳諧〉——	上 杉 未 央	117-137
1895 年のプルースト	中 野 知 律	139-168
サント=ブーヴは「我慢のならない」読者なのか——『失われた時を求めて』におけるセヴィニエ夫人、ラ・フォンテーヌへの言及——	池 田 潤	169-181
受動および非人称用法の再帰動詞と総称性	井 口 容 子	183-191
アニエス・ソレルの受難——ヴォルテールの『オルレアンの処女』再読——	北 原 ル ミ	193-210
ルイ・フィギエ『汝自身を知れ』における人体と死への眼差し	槇 野 佳奈子	211-220
『書評』『抒情の変容——フランス近現代詩の展望』(廣田大地・中野芳彦・五味田泰・山口孝行・森田俊吾・中山慎太郎 著)	坂 口 周 輔	221-226
エミール・ゾラと象徴主義——セザンヌ、マラルメとの書簡から——	野 田 農	227-241
『書評』イレーヌ・カラメ『ショパン神話』	西 村 友樹雄	243-250
アンドレ・ヴィオリスのグラン・ルポルタージュ——極東関連の調査を中心に——	真 野 倫 平	251-265
『書評』ブーカン版ドリュ・ラ・ロシェル小説集	松 尾 剛	267-270
詩の始まりとしての反ロマン主義 ——初期ポンジュにおける古典詩学の再建と解体——	太 田 晋 介	271-294
「できるかぎり文字どおりに」——ベルナール・フランクによる 深沢七郎『檜山節考』のフランス語訳をめぐって——	笠 間 直穂子	295-314
Le 7 décembre 1933 — le prix de Goncourt et le prix des Deux Magots —	ISAO OKI	315-327

第 42 号 (2023 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
ジッドとチボーデの対話 (2) ——1929-1936 年の往復書簡——	吉 井 亮 雄	1-43
ジッドと「ヴィ・ウールーズ賞」——『狭き門』の選出辞退をめぐって——	吉 井 亮 雄	45-76
《資料紹介》ヴァレリーとジャムのジッド宛未刊書簡	吉 井 亮 雄	77-82
ジッド最初の劇作品『サウル』 ——サウル、メナルク、そしてオスカー・ワイルド——	小 坂 美 樹	83-94
アンドレ・ジッドの音楽観における反ドイツ的側面	西 村 友樹雄	95-111

ジッドにおける「神」と「キリスト」	西 村 晶 絵	113-125
響き合う〈魂〉——ポール・クローデルと平田国学——	大 出 敦	127-142
文学、言語、伝統——滞日期ポール・クローデルの講演活動——	学 谷 亮	143-163
クローデルにおける仏独関係——聖人詩から『繡子の靴』3日目1場へ——	上 杉 未 央	165-183
「誠実さの狂気」——『スワン家の方へ』の書評をめぐって——	中 野 知 律	185-198
プルーストとヴェルサイユ庭園	津 森 圭 一	199-221
『サント=ブーヴに反論する』受容史再考 ——サント=ブーヴの側から読むプルースト——	池 田 潤	223-239
フランス語の再帰・非再帰形自動詞再考	井 口 容 子	241-252
〈試し読み〉とは何か？	飯 田 伸 二	253-265
ルイ・フィギエが描き出した「半人前学者」——写真をめぐる記述を中心に——	槇 野 佳奈子	267-278
脱内面化の詩学(2)——ボードレールからマラルメへ——	坂 口 周 輔	279-296
ゾラとドレフュスにおける真実を語る言葉——悪魔島の沈黙と取り戻した声——	高 橋 愛	297-317
ゾラ『作品』における未完の風景画——小説と絵画の生成過程——	野 田 農	319-330
委任代表と受肉代表 ——ドリュ・ラ・ロシェル『馬上の男』における表象の政治学——	松 尾 剛	331-350
ポンジュ詩学の虚軸としてジャン・ポーラン ——「言葉の力」の主題を中心に——	太 田 晋 介	351-376
ケベック文学と移民作家キム・チュイの初期3部作	関 未 玲	377-393
Genèse de style, style de genèse : <i>Novembre</i> de Gustave Flaubert	ATSUKO OGANE	395-411
André Malraux et sa fameuse fausse citation	ISAO OKI	413-430

第41号(2022年12月)	執筆者	頁数
ジッドとチボーデの対話——1927年の往復書簡——	吉 井 亮 雄	1-42
ジッドとシモーヌ・マリー——書簡集『ある彫刻家への手紙』をめぐって——	吉 井 亮 雄	43-64
ジッドのリシャール・エイド宛未刊書簡	吉 井 亮 雄	65-74
メナルク像の継続と変遷——アンドレ・ジッドとウージェーヌ・ルアール——	小 坂 美 樹	75-92

アンドレ・ジッドにおける反ロマン主義 ——1920年代の古典主義・ロマン主義論争——	西 村 友樹雄	93-112
ヴァレリー「ナルシスのカンタータ」試訳 ——フランス韻文詩をどう翻訳するか——	鳥 山 定 嗣	113-140
ヴァレリーあるいは「石の女」——『ネエールへの手紙』をめぐる—考察—	松 田 浩 則	141-168
『書評』ヴァレリー著 / 塚本昌則訳『ドガ ダンス デッサン』	安 永 愛	169-172
ブルーストとセザール・フランク——エリートと大衆——	和 田 章 男	173-190
マドレーヌの「風味」——『失われた時を求めて』における想起の語り——	中 野 知 律	191-222
《図書紹介》吉川一義(編)『ブルーストと芸術』	池 田 潤	223-232
コレージュ改革後のブルヴェ試験——2017年フランス語読解問題の検討——	飯 田 伸 二	233-245
古典主義的抒情詩とロマン主義的抒情詩 ——シャルル・バトゥーとスタール夫人——	松 浦 菜美子	247-261
ルイ・フィギエとステレオスコープ	槙 野 佳奈子	263-274
ゾラの『獣人』『ルルド』における鉄道の表象 ——風景・移動・知覚の観点から——	野 田 農	275-287
見えないものを見る——モーパッサンの幻想小説——	足 立 和 彦	289-298
脱内面化の詩学——ボードレールからマラルメへ——	坂 口 周 輔	299-315
定期刊行物から世紀末を読み直す(1) ——ポール・アダンと1880年代の小新聞グループ——	合 田 陽 祐	317-338
滞日期ポール・クローデルの詩学における「空白」の概念 ——詩の存在論をめぐって——	学 谷 亮	339-356
もうひとつの『田舎司祭の日記』	野 村 知佐子	357-362
セリーヌの〈見出された〉原稿をめぐって	木 下 樹 親	363-368
Autour de la chanson populaire dans <i>L'ivrogne</i> , drame inachevé de Baudelaire	ISAO OKI	369-386

第40号(2021年12月)	執筆者	頁数
「サント=ブーヴに逆らって」の転生 ——ブルースト小説の執筆後半期における美学的思索の配置と変奏——	中 野 知 律	1-29

『失われた時を求めて』におけるオデットのイメージ ——オデットからスワン夫人へ——	松 原 陽 子	31-46
ラスキンの庭園美学とプルーストの植物学的詩学	津 森 圭 一	47-66
思想なき詩についての文学論の生成 ——『失われた時を求めて』におけるブロックとゲルマント夫人の意見——	池 田 潤	67-81
『書評』『プルーストの音楽』——プルーストと音楽をめぐる最新研究の動向——	和 田 章 男	83-92
フランス語と英語における譲渡不可能所有構文	井 口 容 子	93-102
祈りのあとさき——『アンヌ・ド・ブルターニュの大時祷書』をめぐって——	田 邊 めぐみ	103-125
ふたつの『悪魔の陽の下に』——ベルナノスとモーリス・ピアラ——	野 村 知佐子	127-131
『書評』ドリュ・ラ・ロシェル『内面の手帳』	松 尾 剛	133-137
La résonance du cri dans les textes de Bataille	ISAO OKI	139-154
ポンジュ詩学の虚軸としてのポーランとシュルレアリスム ——比喩・イマージュの主題を中心に——	太 田 晋 介	155-176
作家パスカル・キニャールが日本に残したもの ——『ル・アーブルから長崎へ』の余白に——	小 川 美登里	177-182
ポール・クローデルと戦争詩——「聖女ジュヌヴィエーヴ」をめぐって——	上 杉 未 央	183-200
ポール・クローデルの日本観と大正天皇崩御——「ミカドの葬儀」を中心に——	学 谷 亮	201-215
『研究動向』ジッド書簡研究の現状	小 坂 美 樹	217-224
ジッドのシャルル・デュ・ボス宛未刊書簡	吉 井 亮 雄	225-234
アンドレ・ジッド=ポール・アルシャンボー往復書簡 ——『アンドレ・ジッドの人間性』をめぐって——	吉 井 亮 雄	235-244
ジッドのマックス・シャッピ宛未刊書簡	吉 井 亮 雄	245-250

第 39 号 (2020 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
『見出された時』におけるゴンクールの未発表擬似日記	吉 川 一 義	1-17
『失われた時を求めて』における海の風景 ——印象派画家の眼をもつ主人公の誕生——	加 藤 靖 恵	19-35
『失われた時を求めて』におけるステルマリアのイメージ ——ステルマリア嬢からステルマリア夫人へ——	松 原 陽 子	37-48

『失われた時を求めて』の部屋の描写における無意志的記憶と挿話的レミニサンス	平 光 文 乃	49-65
不都合な加筆——アルベルチーヌの墓標をどこに建てるか——	中 野 知 律	67-92
プルーストと音楽受容——人間的な、あまりに人間的な——	和 田 章 男	93-118
『書評』和田章男『プルースト 受容と創造』	小 黒 昌 文	119-124
『書評』美食の文化史と作家研究の「マリアージュ」 ——中野知律『プルーストとの饗宴』——	坂 本 浩 也	125-128
フランス語の譲渡不可能所有者与格の代名動詞とロシア語の с я 動詞	井 口 容 子	129-143
フランス語教育の価値転換——前期中等教育を中心に——	飯 田 伸 二	145-158
小説における象徴主義の記号理論——記号の循環と開かれた解釈をめぐって——	合 田 陽 祐	159-182
『田舎司祭の日記』の聖性	野 村 知佐子	183-190
習作時代のバタイユと古文書学校	大 木 黙	191-210
『書評』恒川邦夫『サン=ジョン・ペルスと中国』 ——〈アジアからの手紙〉と『遠征』——	山 田 広 昭	211-215
『書評』『虚実のあわいに』——大浦康介退職記念論文集——	松 尾 剛	217-220
ジャン=リュック・ナンシーの『若きカルプ』——ヴァレリー詩のパロディ——	鳥 山 定 翳	221-237
『書評』森本淳生・鳥山定嗣編『愛のディスクール』 ——ヴァレリー「恋愛書簡」の詩学』	安 永 愛	239-248
ジッドの遺稿『ル・ラミエ』——森鳩は歓びとともに飛びたつ——	小 坂 美 樹	249-261
ジッド『重罪裁判所の思い出』の献辞をめぐって	吉 井 亮 雄	263-274
自らを語るジッド——2つの未刊自筆稿——	吉 井 亮 雄	275-282

第38号(2019年12月)	執筆者	頁数
プルーストと『春の祭典』	和 田 章 男	1-21
コンブレーの司祭のおしゃべり——教会が位置する空想の地図の変遷——	加 藤 靖 恵	23-36
プルーストとナビ派の画家たち	津 森 圭 一	37-58
『失われた時を求めて』におけるイメージと色彩 ——登場人物の瞳と背景をめぐって——	松 原 陽 子	59-72

ブルーストと「パランプセスト」	中野知律	73-92
国際シンポジウム「ブルーストと受容の美学」	和田章男	93-100
『書評』加藤靖恵『ブルーストにおける花の世界の変遷』	小黒昌文	101-104
La lumière de la civilisation et l'obscurité primitive — <i>Le Docteur Claude, Conscience et Justice</i> d'Hector Malot —	Aya UMEZAWA	105-115
受動的再帰構文と属性叙述	井口容子	117-125
百閒漫歩——逢魔が時の文学——(その10)	森茂太郎	127-169
サイエンスライターとしてのエミール・リトレ ——『哲学的視点から見た科学』の構成と序文——	中筋朋	171-178
マネ『アプサントを飲む男』とボードレール	吉田典子	179-206
詩とリアリズム——ゾラ、コペ、モーパッサン	足立和彦	207-224
マラルメにおける室内装飾と詩のディスクール ——「古序曲」のタペストリーをめぐって——	松浦菜美子	225-238
跛行と韻律——ヴェルレーヌの13音節詩句をめぐって——	倉方健作	239-249
混沌を分かつ声——ドリュ・ラ・ロシェルと撞着語法——	松尾剛	251-264
アンドレ・ジッドの小説美学——『若い作家への助言』解題——	小坂美樹	265-278
ジッドの『贋金つかい』における「悪魔」	西村晶絵	279-296
ジッドの韻文詩「海辺の墓にて」	吉井亮雄	297-306
ジッドのウィリー・スキュルマンス宛書簡——ベルギー人愛書家との交流——	吉井亮雄	307-350

第37号(2018年12月)	執筆者	頁数
La représentation de l'âme de la Vierge dans la Dormition : d'après les notes d'Émile Mâle	Yasué KATO	1-18
『翻訳』「知識・技能・教養からなる共通基盤」	飯田伸二	19-42
百閒漫歩——逢魔が時の文学——(その9)	森茂太郎	43-74
ブルターニュ公家の弔いのかたち——『ピエール2世の時祷書』を中心に——	田邊めぐみ	75-90
モンテニュの「気をそらすこと」とパスカルの「気晴らし」	山上浩嗣	91-111

17世紀の詩学における「認知」	永 盛 克 也	113-132
『赤と黒』の校訂とレナール夫人像 ——解釈と受容の問題——	高 木 信 宏	133-148
マラルメの名をめぐって	鳥 山 定 翠	149-166
ヴェルレーヌとモンティセリ	倉 方 健 作	167-174
ラシルドの「脳の劇」における幻覚をめぐって ——幻想小説と科学小説のあいだで——	中 筋 朋	175-192
プルーストとモネの睡蓮画 ——ヴィヴォンヌ川の睡蓮の場面をめぐって——	和 田 章 男	193-211
『失われた時を求めて』における舞台芸術 ——小劇場の演者——	松 原 陽 子	213-224
《翻訳》ベルナノス『欺瞞』(抄)	野 村 知佐子	225-232
靈的避難所としての政党 ——フランス人民党のドリュ・ラ・ロシェル——	松 尾 剛	233-248
セリーヌのパンフレ復刊計画をめぐって	木 下 樹 親	249-254
ジッドによる未完のユゴー論 ——百年後の「ユゴー、残念ながら！」——	小 坂 美 樹	255-266
ジッドにおける「悪魔」 ——ウィリアム・ブレイク解釈を踏まえて——	西 村 晶 絵	267-280
ジッド「チュニスの解放」をめぐる書誌的考察	吉 井 亮 雄	281-290

第36号(2017年12月)	執筆者	頁数
<i>L'Amour absolu d'Alfred Jarry, un récit d'images</i>	Aurélie BRIQUET	1-17
百閒漫歩 ——逢魔が時の文学—— (その8)	森 茂太郎	19-54
世界表象の光と闇 ——エナルゲイアとエネルゲイアの概念をめぐって——	玉 田 敦 子	55-75
詩人とガラス瓶 ——ヴェルレーヌの「兄」「姉」をめぐって——	倉 方 健 作	77-84
プルーストとワーグナー受容 ——啓示としての『パルジファル』——	和 田 章 男	85-99
プルーストとノルマンディー地方の教会 ——リジューとタオン——	加 藤 靖 恵	101-118
プルーストの初期作品における「風景」 ——ボードレール「芸術家の告白の祈り」との関連で——	津 森 圭 一	119-133
ラ・ベルマの『フェードル』 ——別離の苦悩とラシーヌの詩句——	松 原 陽 子	135-143
菩提樹の記憶 ——『失われた時を求めて』における「復活」のモチーフ——	中 野 知 律	145-164

ヴァレリーの詩集『旧詩帖』の題名と構成	鳥 山 定 嗣	165-182
ヴァレリーと『リュシアン・ルーヴェン』——魅惑されたナルシス——	高 木 信 宏	183-206
表象は神への供物たりうるか ——ドリュ・ラ・ロシェルの『ブレーシュ』異文——	松 尾 剛	207-218
『書評』クレマンス・カルドン=カン『文芸からフランス語へ ——民主化時代の学問分野』	飯 田 伸 二	219-226
日記体小説のタイトルについて ——アンドレ・ジッドの場合——	小 坂 美 樹	227-242
『背徳者』における病 ——ジッドのニーチェ解釈とキリスト教思想を踏まえて——	西 村 晶 絵	243-254
ジッドとアンドレ・ボーニエ	吉 井 亮 雄	255-272

第35号(2016年12月)	執筆者	頁数
フランス語非再帰形反使役動詞の統語構造と意味	井 口 容 子	1-10
国民文学から文学遺産へ ——前期中等教育を中心に——	飯 田 伸 二	11-24
作品に見る演劇人モリエール	久保田 麻 里	25-37
スタンダリスム史関連資料 ——ジャン・ド・ミティ未刊書簡——	高 木 信 宏	39-58
モニュメントのアナクロニズム ——ゾラの『愛の一ページ』をめぐって——	中 村 翠	59-69
サン=ポル=ルーの芸術論と演劇の関わり ——イデオレアリスム登場の文脈から——	中 筋 朋	71-83
プルーストとショパン	和 田 章 男	85-99
アミアンの黄金の聖母とサンザシの生け垣 ——『失われた時を求めて』ジルベルト登場場面の生成——	加 藤 靖 恵	101-118
プルーストの庭園美学 ——「閉ざされた庭」と「開かれた庭」のあいだで——	津 森 圭 一	119-135
アルベルチーヌと海辺の少女たち ——花咲く乙女たちのイメージ——	松 原 陽 子	137-147
L'ameublement et la création artistique dans « Sur la lecture » de Proust	Ayano HIRAMITSU	149-167
Le scandale Marie, ou un autre prélude à « J'accuse... ! »	Yuji MURAKAMI	169-195
Où est ma maison ? — <i>Das Unheimliche</i> de Pascal Quignard	Midori OGAWA	197-207
Valéry entre prose et vers : De « Paradoxe sur l'architecte » à « Orphée »	Teiji TORIYAMA	209-229

古典主義の理論家レーモン・クノー ——『ヴォロンテ』誌の論考をめぐって——	久 保 昭 博	231-250
アブラハムの物語から『田舎司祭の日記』を読む	野 村 知佐子	251-260
イデア論の行方 ——ドリュ・ラ・ロシェルの『奇妙な旅』——	松 尾 剛	261-278
デュヴェールを読むために	木 下 樹 親	279-286
ジッドとクロソフスキ ——「生きた貨幣」をめぐって——	森 井 良	287-300
ジッドにおける「病」の価値転換 ——1890年代のクリスティアニスム観の変化——	西 村 晶 絵	301-313
ジッド作品における登場人物たちの日記 ——「物」としての日記について——	小 坂 美 樹	315-326
ジッドとアンドレ・カラス	吉 井 亮 雄	327-364

第34号(2015年12月)	執筆者	頁数
Mémorial, plâtre et biscuits	Xavier BAZOT	1-28
フランス語の非再帰形自動詞と事象の内因性	井 口 容 子	29-37
「抜粋選」とは何か ——その歴史的役割をめぐって——	飯 田 伸 二	39-55
百閒漫歩 ——逢魔が時の文学——(その7)	森 茂太郎	57-82
アルスナル図書館所蔵のデュ・バルタス『聖週間』(1581)について	岩 根 久	83-87
ドン・ジュアンの復活 ——モリエール『石像の宴』から『人間嫌い』へ—	久保田 麻 里	89-103
J-J・アンペールのレカミ夫人宛書簡 ——スタンダール関連資料の再検証—	高 木 信 宏	105-113
ベルト・モリゾと日本美術(3) ——モリゾ『娘とグレイハウンド犬』 とマネ『休息』における浮世絵の画中画を中心には—	吉 田 典 子	115-143
ヴェルレーヌとデボルド=ヴァルモール	倉 方 健 作	145-154
記憶のなかのアルベルチーヌ ——不在の人とそのイメージ—	松 原 陽 子	155-165
『囚われの女』の第3の「朝」 ——「パリの物売りの声」の生成—	中 野 知 律	167-188
プルーストの庭園論 ——庭園の詩学と小説の美学のあいだで—	津 森 圭 一	189-207
ペギー『ジャンヌ・ダルク』における悪の問題	北 原 ル ミ	209-219
ベルナノス『田舎司祭の日記』を読むために	野 村 知佐子	221-229

振り返らないオルフェウス——ドリュ・ラ・ロシェルの短編「声」をめぐって——	松 尾 �剛	231-242
貧しさと太陽——カミュの初期作品をめぐって——	安 藤 智 子	243-249
フランスで黒人であること ——レオノーラ・ミアノ『消えた星のように』を中心に——	元 木 淳 子	251-271
ジッドにおける「ディスピニビリテ」の概念	森 井 良	273-287
ジッドとヴァレリーの詩をめぐる交流——初期の友情を中心に——	鳥 山 定 嗣	289-301
ジッドとヴァレリーの詩をめぐる交流(2) ——ヴァレリーの「紡ぐ女」におけるジッドの影響——	鳥 山 定 嗣	303-317
ジッド作品における日記を書く女たち ——『狭き門』のアリサと『女の学校』のエヴリーヌ——	小 坂 美 樹	319-331
ジッドとエドゥアール・デュジャルダン	吉 井 亮 雄	333-360
『ジッド=フォール往復書簡集』補遺	吉 井 亮 雄	361-369

第33号(2014年12月)	執筆者	頁数
Trois de nos enfants ( <i>monologue pour le théâtre</i> )	Xavier BAZOT	1-15
ポーランド語の与格非人称再帰構文とフランス語の受動的再帰構文 ——総称性とアスペクト——	井 口 容 子	17-27
戦後フランス語教育の変遷——1940-60年代のコレージュ教科書の事例から——	飯 田 伸 二	29-36
百間漫歩——逢魔が時の文学——(その6)	森 茂太郎	37-60
「囚われの女」の室内画——ピアノラに向かうアルベルチーヌ——	中 野 知 律	61-79
アルベルチーヌのイメージ	松 原 陽 子	81-92
プルーストとエミール・マール(3)——1903年4月のラン大聖堂訪問——	加 藤 靖 恵	93-103
Le salon de Mme de Villeparisis : l'affaire Dreyfus vue par Stendhal ?	Francine GOUJON	105-123
La correspondance de Marcel Proust, du journal quotidien à l'autobiographie : questions génériques et questions éditoriales	Pierre-Edmond ROBERT	125-142
Le prix Goncourt : une institution française. Le cas de Marcel Proust, lauréat en 1919 pour <i>À l'ombre des jeunes filles en fleurs</i>	Pierre-Edmond ROBERT	143-157
子宝祈願の遺産——ブルターニュ公継承問題をめぐって——	田 邊 めぐみ	159-174

エッツェル版『パルムの僧院』の異文——テクストの修正をめぐって——	高木信宏	175-194
ネルヴァル, 廃墟と宗教 ——『幻視者たち』「クイントゥス・オークレール」——	辻川慶子	195-211
ベルト・モリゾと日本美術（2） ——《麦わら帽子の少女》における浮世絵の画中画について——	吉田典子	213-236
無名の詩人, 半ば未知の詩人, 不遇の詩人 ——ヴェルレーヌ『呪われた詩人たち』のロジック——	倉方健作	237-247
現実と表象の狭間で ——ドリュ・ラ・ロシェルにおける鏡像の問題——	松尾剛	249-262
〈存在〉についての一考察 ——ブランショとキルケゴー——	野村知佐子	263-270
千々岩靖子『カミュ——歴史の裁きに抗して』	安藤智子	271-275
La nostalgie plotinienne et l'absurde camusien	Tomoko ANDO	277-301
Entre la catastrophe et la survivance : <i>Hiroshima mon amour</i> , 55 ans après	Midori OGAWA	303-314
ジッドのアンリ・マシス宛未刊書簡をめぐって	吉井亮雄	315-328
シャンピオン版『20世紀文芸雑誌事典』	吉井亮雄	329-334

第32号(2013年12月)	執筆者	頁数
エメ・セゼール『生誕百年』	恒川邦夫	1-38
アルベール・カミュ生誕百周年	千々岩靖子	39-49
L'absurde et la poétique du présent dans <i>L'Envers et l'Endroit</i> de Camus	Tomoko ANDO	51-68
中野知律『プルーストと創造の時間』	加藤靖恵	69-76
エリック・ブノワ『ベルナノス, 文学と神学』	野村知佐子	77-81
百間漫歩 ——逢魔が時の文学——(その5)	森茂太郎	83-110
ポーランド語の与格を伴う非人称再帰構文 ——フランス語の受動的再帰構文との対照において——	井口容子	111-121
教科書のなかのお伽話 ——国語教科書編集理念解明のためのノート——	飯田伸二	123-136
時祷書の語り ——マルグリット・ドルレアンの子宝祈願をめぐって——	田邊めぐみ	137-152
デュ・バルタスを窘めるクリストフル・ド・ガモン ——サラマンダー, 不死鳥, ペリカン——	高橋薰	153-164

新聞を読むスタンダール ——『エゴチスムの回想』執筆とその背景——	栗 須 公 正	165-188
プルーストとエミール・マール（2） ——シャルトルとラン大聖堂における聖母の魂を運ぶ天使の彫像——	加 藤 靖 恵	189-203
セリーヌ『なしくずしの死』英語訳の比較検討 ——ジョン・マーカス訳とラルフ・マンハイム訳——	木 下 樹 親	205-212
デ・フォレ〈インファンス〉覚書	佐 藤 典 子	213-220
ジッドとナチュリズム ——サン=ジョルジュ・ド・ブーエリエとの往復書簡——	吉 井 亮 雄	221-260
ジッドの盛澄華宛書簡	吉 井 亮 雄	261-292

第31号(2012年12月)	執筆者	頁数
中間構文における任意動作主と未完了アスペクト	井 口 容 子	1-9
刷新と伝統のはざまで ——1938年男子コレージュ用フランス語指導書をめぐって——	飯 田 伸 二	11-30
百間漫歩 ——逢魔が時の文学—— (その4)	森 茂太郎	31-57
Deux préfaces amicales de Marcel Proust	Pierre-Edmond ROBERT	59-66
Proust et les avions de Tolstoï : un « pastiche militaire » dans <i>Le Temps retrouvé</i>	Francine GOUJON	67-86
プルーストと「ゴンクールの日記」	和 田 章 男	87-102
「ミス・サクリパン」の帽子 ——『失われた時を求めて』における文学の素描と絵画の素描——	加 藤 靖 恵	103-114
第1次世界大戦後のプルースト受容 ——『花咲く乙女たちの陰に』とゴンクール賞の余波——	禹 朋 子	115-139
「コンブレー」の生成をめぐる画期的著書 ——和田章男『プルーストの小説創造』——	中 野 知 律	141-145
祈りの文脈 ——『カトリーヌ・ド・ローアンと フランソワーズ・ド・ディナンの時祷書』——	田 邊 めぐみ	147-161
『ローマの福音書』 ——アントリ 4世治下の宗教論争の一断面——	高 橋 薫	163-208
墓の彼方からの手紙 ——エツツエル版『パルムの僧院』の編集をめぐって——	高 木 信 宏	209-226

『ボヴァリー夫人』におけるフェリシテ像の成立	大橋 絵理	227-238
ゾラとボードレール ——ゾラの文学批評におけるボードレール評価について——	吉田 典子	239-264
ある戦争捕虜の肖像 ——ジャック・リヴィエールと第1次世界大戦——	小黒 昌文	265-278
没後50年と生誕100年に際して ——セリーヌとリュセツ未亡人——	木下樹親	279-285
「デラシネ論争」「ポプラ論争」の余白に ——ジッドとルイ・ルアールの往復書簡——	吉井 亮雄	287-298

第30号(2011年12月)	執筆者	頁数
Marcel Proust et « Les trois critiques », selon Albert Thibaudet	Pierre-Edmond ROBERT	1-12
La lecture de <i>La Douleur</i> de Richaud chez Camus	Tomoko ANDO	13-31
百間漫歩 ——逢魔が時の文学—— (その3)	森 茂太郎	33-54
フランス語受動的再帰構文の意味構造	井口容子	55-62
フランス語・文学教育の新局面 ——1925年カリキュラム指導書をめぐって——	飯田伸二	63-85
写本装飾の位相 ——『マルグリット・ドルレアンの時祷書』の余白装飾——	田邊めぐみ	87-102
ヴィオレ=ル=デュックと文芸誌『リセ・フランセ』——書誌的側面から——	岩根久	103-115
1831年、1832年のスタンダール ——流動する歴史の傍らで——	栗須公正	117-148
ゾラはマネを理解しきれなかったのか ——マラルメとゾラの美術批評におけるマネ評価について——	吉田典子	149-190
失われた時を求めて』初期受容 ——『スワン家の方へ』をめぐって——	禹朋子	191-207
メムノンの呴き ——プルーストと〈声〉の詩学——	小黒昌文	209-222
エルスチールとエミール・マール ——プルースト草稿カイエ34の再検証——	加藤靖恵	223-244
ギュス・ボファが見た〈恐怖〉	木下樹親	245-253
ウイーヌ氏、マイナスの司祭	野村知佐子	255-263
ドリュ・ラ・ロシェルと表象の危機 ——『シャルルロワの喜劇』再読——	松尾剛	265-280
歴史と忘却 ——反=歴史的小説としての『最初の人間』——	千々岩靖子	281-299
ジッドとガストン・ソーヴボワ	吉井亮雄	301-314

第29号(2010年12月)	執筆者	頁数
ジッドとチボーデ	吉井亮雄	1-40
ジッドと『タン・フュチュール』誌	吉井亮雄	41-44
バルト=カミュ論争再考 ——『ペスト』における歴史記述の問題をめぐって——	千々岩靖子	45-58
〈スタンダール=クラブ〉余話 ——ポール・レオトーのアドルフ・ポープ宛未刊書簡——	高木信宏	59-66
フランス語の受動的代名動詞と中間構文	井口容子	67-77
百間漫歩 ——逢魔が時の文学—— (その2)	森茂太郎	79-93
イヴ・シトン『読解・解釈・現代化』	飯田伸二	95-101
ロベール=ショヴァン編『セリーヌになる』	木下樹親	103-106
アンドレ・アブー『行間のアルベール・カミュ』	安藤智子	107-110
Du texte à l'image : Marcel Proust et <i>À la recherche du temps perdu</i> à l'écran	Pierre-Edmond ROBERT	111-119
La poésie et la genèse d' <i>À la recherche du temps perdu</i> : l'évolution de la critique proustienne de Leconte de Lisle	Yasue KATO	121-138
<i>Retour de l'U.R.S.S.</i> de Gide : revenir de l'utopisme à l'utopie du poème	Olivier KACHLER	139-150
Le 6 février 1934 et les écrivains (II) : André Chamson	Koichiro HAMANO	151-168
De l'oubli à la nostalgie : le tournant dans les écrits de jeunesse chez Camus	Tomoko ANDO	169-187
Une étoile filante (en marge de la <i>Correspondance Paulhan-Petitjean</i> )	Pascal MERCIER	189-193
Claude Lévi-Strauss et la littérature japonaise	Hervé-Pierre LAMBERT	195-209

L'Équitation française et la Révolution	Igor SOKOLOGORSKY	11-18
La version française de l'imaginaire posthumain	Hervé-Pierre LAMBERT	19-38
百間漫歩 ——逢魔が時の文学——	森 茂太郎	39-52
中立的代名動詞再考	井 口 容子	53-66
文法の回帰 ——2009年施行コレージュ新カリキュラムをめぐって——	飯 田 伸二	67-78
アウルスの欲望 ——フローベールの『ヘロディアス』——	大 橋 絵理	79-90
ブルーストとマンテニヤ (2)	加 藤 靖 恵	91-107
母と娘 ——ベルナノスとバルベー・ドールヴィイ——	野 村 知佐子	109-118
ドリュ・ラ・ロシェルにおけるヴァリアントの問題 ——『夢見るブルジョワジー』と「シャルルロワの喜劇」——	松 尾 剛	119-135
セリーヌのフラマリオン受容	木 下 樹 親	137-150
カミュ『裏と表』 ——ノスタルジーの昇華——	安 藤 智 子	151-161
アンドレ・ジッドとポール・フォール (2)	吉 井 亮 雄	163-178
ジッドのジャン・カバネル宛未刊書簡をめぐって	吉 井 亮 雄	179-184

第27号(2008年12月)	執筆者	頁数
アンドレ・ジッドとポール・フォール	吉 井 亮 雄	1-21
コントの成立 ——『三つの物語』と書簡——	大 橋 絵理	23-36
モーパッサンの幻想と病勢	宮 川 佳 代	37-43
ブルーストとプリミティヴ派絵画 ——「スワン夫人をめぐって」の娼家とマンテニヤ——	加 藤 靖 恵	45-58
『夢の子』の変容 ——ベルナノス『新ムーシェット物語』——	野 村 知佐子	59-68
ハティビ『二重言語の愛』における語りの問題	井 上 祥 子	69-79
「バイリンガル作家」ナンシー・ヒューストン	横 川 晶 子	81-85
「メルモ=ポンジュ往復書簡」	飯 田 伸二	87-89

教科書の詩学 ——フランスのコレージュにおける国語教育の現状——	飯 田 伸 二	91-112
知覚動詞・認知動詞の代名動詞	井 口 容 子	113-123
La nostalgie originelle dans l'œuvre de Camus	Tomoko ANDO	125-152
Nietzsche et la mélancolie d'Eschyle	Igor SOKOLOGORSKY	153-165
Le sujet du silence chez Mallarmé	Olivier KACHLER	167-176

第 26 号 (2007 年 12 月)	執 筆 者	頁 数
La dynamique révolutionnaire du despotisme selon Montesquieu	Igor SOKOLOGORSKY	1-18
Voir avec les yeux du langage : <i>Intérieur et Les Sept princesses</i> de Maeterlinck	Olivier KACHLER	19-34
La nostalgie chez Albert Camus	Tomoko ANDO	35-47
受動的代名動詞における未完了性と自発性	井 口 容 子	49-58
『コレージュ版国語試験要綱』を読む ——フランスのコレージュにおける国語教育の現状——	飯 田 伸 二	59-74
ラシーヌのアカデミー演説 (訳・註)	柳 光 子	75-90
第 12 回国際 18 世紀学会について	阿 尾 安 泰	91-101
創作と経済危機 ——『三つの物語』と書簡——	大 橋 絵 理	103-116
『剥製の手』と病	宮 川 佳 代	117-126
ユダの顔をもつ司祭 ——ベルナノス『闇』のセナーブル神父——	野 村 知佐子	127-150
『異邦人』の創作過程をめぐって	古 野 千 恵	151-164
ジッド『オイディップス』校訂版をめぐって	吉 井 亮 雄	165-176
Shinji IIDA, <i>Le Tournant poétique de Francis Ponge</i>	Igor SOKOLOGORSKY	177-178
木下樹親『セリーヌの道化的空間』	飯 田 伸 二	179-182
『カミュ = シャール往復書簡集』	古 野 千 恵	183-186

第25号(2006年12月)	執筆者	頁数
Aglavaine et Sélysette : une tour de silence au milieu des mots	Olivier KACHLER	1-17
フランス語の代名動詞とバルト語派言語の完了受動態構文 ——自発・可能・完了——	井口容子	19-31
コレージュ第6学級フランス語カリキュラム ——翻訳と解説——	飯田伸二	33-45
『赤と黒』の余白に ——『ヴァニナ・ヴァニニ』の成立——	高木信宏	47-63
『聖ジュリアン伝』における2つの身体	大橋絵理	65-86
セナーブルの死 ——ユダへの変容——	野村知佐子	87-97
カミュ『転落』における時間	安藤智子	99-113
ジッドの『ギーターンジャリ』仏語訳 ——翻訳から出版までの経緯——	吉井亮雄	115-127
中地義和『ランボー 自画像の詩学』	森茂太郎	129-135
ルバテ=クストー『敗者たちの対話』	松尾剛	137-142

第24号(2005年12月)	執筆者	頁数
Histoire palimpseste : le nouveau fantastique	Masahiro IWAMATSU	1-36
所有の与格の諸相	井口容子	37-51
『ジュリアン』のアイデア	高木信宏	53-75
モーパッサンの幻想小説における「夢」	宮川佳代	77-91
甘美な戦慄 ——ジェイコブス『猿の手』をめぐって——	森茂太郎	93-105
『田舎司祭の日記』における聖性の逆説	野村知佐子	107-121
道化物語としての『夜の果てへの旅』	木下樹親	123-138
『異邦人』における「太陽」	古野千恵	139-146
カミュ『ペスト』における語りの問題	安藤智子	147-164
ジッド『放蕩息子の帰宅』校訂版補遺	吉井亮雄	165-174
『デバ』誌特集号「フランス語をどう教えるか」	飯田伸二	175-179

第23号(2004年12月)	執筆者	頁数
受動的代名動詞のモダリティーと中相範疇機能拡張のメカニズム	井口容子	1-17
『赤と黒』における〈聖堂〉——第1部・第18章の制作をめぐって——	高木信宏	19-49
モーパッサンの幻想小説にみる〈超自然〉の表象	宮川佳代	51-66
バタイユとベルナノスにおける聖なるもの	野村知佐子	67-82
矛盾の敷居、あるいは道化のはじまり——『夜の果てへの旅』研究序論——	木下樹親	83-95
サン=テグジュペリにおける〈砂漠〉	木原雄一	97-114
『狭き門』校訂版作成のための覚え書き	吉井亮雄	115-139
『アンドレ・ブルトン、フォンテーヌ街42番地』	川口大輝	141-145
A・コルビック『カミュ——不条理、反抗、愛』	古野千恵	147-150
『カミュと20世紀のエクリチュール』	安藤智子	151-155
C・コランジェロ『ジャン・スタロバンスキー』	原田裕里	157-161

第22号(2003年12月)	執筆者	頁数
Devenir d' <i>Hérodiade</i>	Olivier SÉCARDIN	1-33
事象叙述的性格の受動的代名動詞と状況補語	井口容子	35-43
母性愛とヒロイズム——『赤と黒』第1部・第18章の制作——	高木信宏	45-64
語りのリズムとバランス——アポリネール『腐ってゆく魔術師』——	川口藍	65-78
廃墟の道化師たち——セリーヌの〈ドイツ3部作〉——	木下樹親	79-99
魔術師との対話——ブルトン『ナジヤ』をめぐって——	飯田伸二	101-113
バタイユとキルケゴールにおける罪の概念	野村知佐子	115-129
L・ブリッセ『ポーランの「新フランス評論」』	飯田伸二	131-133
F・ソマド『無秩序の人ドリュ・ラ・ロシェル』	松尾剛	135-138
『狭き門』初出テクストの校正刷	吉井亮雄	139-148

第21号(2002年12月)	執筆者	頁数
Le roman prémonitoire	Jean-Luc AZRA	1-50
Le dialogue d'un solitaire : la pratique discursive de Francis Ponge	Shinji IIDA	51-69
助動詞として <i>avoir</i> を選択する非対格動詞	井口容子	71-86
ルソーをめぐる読解のトポロジー	阿尾安泰	87-97
『ラミエル』における社会諷刺	高木信宏	99-126
財産論から遺伝論へ ——ヴァシエ・ド・ラプージュの〈家族小説〉 ——	松尾剛	127-156
ベルナノス『歓び』における聖なるもの	野村知佐子	157-166
リゴドン語り、あるいは老人の戯言 ——セリーヌの〈ドイツ3部作〉序論 ——	木下樹親	167-176
G・レーマン『聖ジュリアン伝』	大橋絵理	177-180
対談集『教師は弾劾する』	飯田伸二	181-184
二宮正之『小林秀雄のこと ——自然と歴史のあいだ——』	森茂太郎	185-191

第20号(2001年9月)	執筆者	頁数
『赤と黒』の創作過程 ——着想と制作時期の再検証 ——	高木信宏	1-31
「大いなるかな、エペソスのアルテミス」(1) ——メリメ『イールのヴィーナス』をめぐって ——	森茂太郎	33-40
フローベール『ヘロディアス』の地下空間	大橋絵理	41-57
ウィーヌの原型	野村知佐子	59-69
〈めまい〉の夢現劇 ——『またの日の夢物語 II』を読む ——	木下樹親	71-82
『西欧の誘惑』における「オリエント・東洋」	畠亜弥子	83-90
ジャン=ジャック・ルソー像の揺らぎを求めて ——在外研究資料外観 ——	阿尾安泰	91-104
Face au soleil ou la stratégie du relief	Shinji IIDA	105-124
Les métaphores du sommeil	Jean-Luc AZRA	125-140
<i>L'Atelier des « Fleurs du Mal »</i>	Shigeki MIYOSHINO	141-151

D・デルブレイユ『アポリネールとその物語作品』	川 口 藍	153-156
A・ピショ『純粋な社会』	松 尾 剛	157-160
C・カルパンティエ『初等教育修了証書の歴史』	飯 田 伸 二	161-168
「紙のドラゴン」と偽りの遊戯	吉 井 亮 雄	169-176

第 19 号 (2000 年 9 月)	執 筆 者	頁 数
スタンダール『パルムの僧院』——冒頭部の制作をめぐって——	高 木 信 宏	1-25
ボードレールにおける言語の虚脱 ——リヴィエールとベンヤミンによる読解をめぐって——	三吉野 滋 樹	27-46
Réalisme et vraisemblance dans les Contes de Maupassant	Jean-François HANS	47-53
ブルースト——夢の戦略——	今 川 泰 隆	55-66
『虐殺された詩人』における小説世界の二重化	川 口 藍	67-79
セナーブルの死	野 村 知佐子	81-91
松林から見上げる太陽 ——フランシス・ポンジュ『松林手帖』読解のために——	飯 田 伸 二	93-112
夢見られる〈場所〉——『薔薇の奇蹟』を読む——	池 田 和 隆	113-125
1922 年のポンティニー旬日懇話会 ——ジッドのポール・デジタルダン宛未刊書簡——	吉 井 亮 雄	127-140
アドリアン・バイエのラシーヌ評	柳 光 子	141-146
V・デル・リット編『スタンダール総合書誌』	高 木 信 宏	147-152
A・ビュイジーヌ『ヴェルレーヌ』	岡 由 美 子	153-156
セリーヌ『リュセット・テトウーシュとミケルセン先生への獄中書簡』	木 下 樹 親	157-160
B・ブニョ他編『ポンジュ書誌』	飯 田 伸 二	161-164
M・テムマン『アンドレ・マルローの日本』	畠 亜 弥 子	165-168
P-A・タギエフ『フランス人種主義理論』	松 尾 剛	169-172

第 18 号 (1999 年 6 月)	執 筆 者	頁 数
---------------------	-------	-----

Le Geste chez Maupassant	Jean-François HANS	1-5
La question de la parole efficace chez Francis Ponge dans les années 1939-1944	Shinji IIDA	7-38
17世紀のフランス芸術におけるアポロン像	柳 光子	39-60
イメージ表象分析の試み ——ドンキホーテ, ルソー, タミヤン——	阿尾安泰	61-82
感受性と自己認識 (2) ——『日記』から『アンリ・ブリュラールの生涯』まで——	高木信宏	83-106
倒錯の岸辺 ——ゴーチ工『死女の恋』をめぐって——	森 茂太郎	107-130
『人工楽園』と時間	三吉野 滋樹	131-144
フローベール『ヘロディアス』草稿研究 ——主人公像の造型について——	大橋 絵理	145-156
ホモ・ドゥプレクスの「統一性」 ——ヴェルレーヌ『平行して』をめぐって——	岡 由美子	157-169
ペルナノスのふたりの聖人 ——フヌイユの司祭とアンブリクールの司祭——	野村 知佐子	171-181
苦境とけりをつけるために ——セリーヌのパンフレ (3) —	木下樹親	183-194
『アルテルブルグの胡桃の木』における〈民衆〉	畠 亜弥子	195-206
『絶望的な地帯』を抜けて ——ジャン・ジュネの『綱渡り芸人』——	池田和隆	207-217
プレイアッド新版『ラシーヌ全集』	柳 光子	219-223
M・クラペズ『反動的左翼』	松尾 剛	225-228
『ポンジュ = トルテル往復書簡集』	飯田伸二	229-232
「記号論」以後の物語理論	岩松正洋	233-238
『地の糧』初版の表紙をめぐって	吉井亮雄	245-250
ジッドのポール・フォール宛未刊書簡	吉井亮雄	245-250

第17号(1998年6月)	執筆者	頁数
La baguette, la loupe et le râteau (Deux lettres inédites de Valry Larbaud à André Gide)	Pascal MERCIER	1-8
L'avènement d'un poète : Francis Ponge en 1942	Shinji IIDA	9-28

L'inspiration biblique dans les tragédies raciniennes (1674-1691)	Mitsuko YANAGI	29-48
フランス語の再帰的代名動詞と中立的代名動詞	井 口 容 子	49-64
18世紀の権力空間論 ——『演劇に関するダランベール氏への手紙』をめぐって——	阿 尾 安 泰	65-88
駱駝、悪魔、女——カゾット『恋する悪魔』考——	森 茂太郎	89-112
『アルマンス』における主人公像の造型	高 木 信 宏	113-143
反復と〈新しいもの〉——ボードレールの「旅」における nous の多数化——	三吉野 滋 樹	145-164
ヴェルレーヌ・サチュルニアン——処女詩集のタイトルをめぐって——	岡 由 美 子	165-177
ベルナノスのふたりの聖人——ドニサン神父とアンブリクールの司祭——	野 村 知佐子	179-190
臨床医と香具師の想像力——セリーヌのパンフレ(2)——	木 下 樹 親	191-201
ジャン・ジュネの『スプレンディックス』	池 田 和 隆	203-211
異世界の表象における固有名現実素	岩 松 正 洋	213-231
J-F・リオタール『マルローと署名せし者』	畠 亜 弥 子	233-236
M・コロー『マチエール=エモーション』	飯 田 伸 二	237-240
M・ダンブル編『ドリュ、作家にして知識人』	松 尾 剛	241-246
楊 張 若名『ジッドの態度』をめぐって	吉 井 亮 雄	247-250

第16号(1997年7月)	執筆者	頁数
『リュシアン・ルーヴェン』における〈衣裳〉	高 木 信 宏	1-15
ヴェルレーヌの同時代批判——聖ブノワ・ラブル崇拜をめぐって——	岡 由 美 子	17-30
死者と裏切り者——ドリュ・ラ・ロシェルの第一次世界大戦——	松 尾 剛	31-42
たわごとの文学論——セリーヌのパンフレ——	木 下 樹 親	43-57
初期ジュネにおけるコクトーの影響	池 田 和 隆	59-75
Francis Ponge face à l'art contemporain	Shinji IIDA	77-117
Racine devant la condamnation du théâtre	Mitsuko YANAGI	119-142
L・フレース『書簡に見るブルースト像』	今 川 泰 隆	143-145

J・ジェイルズ『ジャン・ジュネの映画』	池田和隆	147-150
« Dialogues Orient-Occident sous le regard de Paul Valéry »	池田和隆	151-155
『ジッド＝ブライ往復書簡集』	吉井亮雄	157-162

第15号(1996年7月)	執筆者	頁数
説明するポンジュ	飯田伸二	1-31
プルーストのネルヴァル論	今川泰隆	33-47
『カルメン』はどのように作られているか——脱神話のための試論——	末松壽	49-69
ポストリアリスト・ファンタジーは幻想文学か ——「とまどい」から「逆転」へ——	岩松正洋	71-96
『名前のない物語』の幻想性	野村知佐子	97-108
ジウリアの恋——スタンダール『社会的地位』の創作をめぐって——	高木信宏	109-123
ドリュ・ラ・ロシェルの反ユダヤ主義	松尾剛	125-142
ジッドとリュシアン・ジャン	吉井亮雄	143-153

第14号(1995年3月)	執筆者	頁数
ドリュ・ラ・ロシェルの『ジル』——ファシズム思想をめぐる考察——	松尾剛	1-34
Au sujet des « Écritures » de Paul Claudel publiée en été 1938, dans <i>Verve</i>	OUYANG Juan	35-44
壁に閉ざされたシャンソン	木下樹親	45-59
ヴィアンとジャズ	前川完	61-68
感受性と自己認識——スタンダール『エゴチズムの回想』管見——	高木信宏	69-82
『モデラート・カンタービレ』にみる創作の転機	田中真理	83-97
ジッド『パリユード』のプレオリジナル ——「ル・クーリエ・ソシアル」と「ルーヴル・ソシアル」——	吉井亮雄	99-116
ジッドと〈小説〉の探求——アラン・グーレ『「贋金つかい」を読む』—	吉井亮雄	117-120

第13号(1994年3月)	執筆者	頁数
---------------	-----	----

『カルメン』はどのように作られているか ——脱神話のための試論——	末 松 壽	1-20
スタンダールの『チェンチー族』	高 木 信 宏	21-34
ヴェルレーヌとリュシアン・レチノワ ——「リュシアン・レチノワ」連作詩編再読——	岡 由 美 子	35-45
ベルナノスとドールヴィイ ——〈秘密〉の機能——	野 村 知佐子	47-58
『ラ・ホールの副領事』における〈逸脱〉	田 中 真 理	59-84
フランス語の過去分詞と反対格仮説	井 口 容 子	85-93
ジッドの結婚生活について今なにを語りうるか ——サラ・オーセイユ『マドレーヌ・ジッド』——	吉 井 亮 雄	95-108

第 12 号 (1993 年 3 月)	執 筆 者	頁 数
ジッドとトルstoi	吉 井 亮 雄	1-13
『ウィーヌ氏』における〈転回点〉の欠如	野 村 知佐子	15-31
ボリス・ヴィアンの『心臓抜き』——断崖の〈家〉が象徴するもの——	前 川 完	33-46
言語・システム・歴史 ——18 世紀研究のための準備ノート——	阿 尾 安 泰	47-66
『言葉なき恋歌』における葛藤	岡 由 美 子	67-77
偽りの旅路 ——Romantic Journey——	森 茂 太 郎	79-94
ボードレールの〈小散文詩〉——「髪の中の半球」と「旅への誘い」——	中 川 裕 二	95-123
エイモス『スタンダールにおける時間と物語』	高 木 信 宏	125-128

第 11 号 (1992 年 3 月)	執 筆 者	頁 数
トルニエ『気象』——逸脱する存在をめぐって——	岩 松 正 洋	1-62
『よい歌』における〈純化〉	岡 由 美 子	63-92
『なしくずしの死』における〈進歩〉と懐古趣味	木 下 樹 親	93-104
『ラミエル』における虚栄の相貌	高 木 信 宏	105-124
『宿命論者ジャック』における小説的真理の探求	山 下 広 一	125-138
ジッド書誌の現状	吉 井 亮 雄	139-159

第10号(1991年10月)	執筆者	頁数
『ギニヨルズ・バンド II』の第37セカンス	木下樹親	1-15
スタンダールの小説における〈まなざし〉	高木信宏	17-36
『ボヴァリー夫人』の〈対〉の構造	田中真理	37-49
『悪魔の陽の下に』における〈不安〉	野村知佐子	51-69
ボリス・ヴィアンの言葉遊び	前川完	71-95
『宿命論者ジャックとその主人』の3つの主題	山下広一	97-129
《研究ノート:コンスタン》セクシュアリテの謎(日記に即して)	高藤冬武	131-136

第9号(1991年3月)	執筆者	頁数
La particule <i>ga</i> en japonais et le problème du « mapping » — Un essai dans le cadre de la Grammaire Lexicale Fonctionnelle —	Yoko IGUCHI	1-44
Autour des deux « Lady Macbeth » dans <i>La Loge (Gakuya)</i> de Shimizu Kunio	Jean-Christian BOUVIER	45-70
総称の <i>le N</i> をめぐる一論争について	古川直世	71-78
トゥルニエの神話的 ——『ガスパール, メルキオール, バルタザール』を読む——	岩松正洋	79-112
セリーヌの『戦争』における〈グロテスク〉	木下樹親	113-128
『アルマンス』における物語の構造化	高木信宏	129-147
『賄金つかい』(ロンドン草稿) 校訂版の批判的検討 ——作品冒頭部の執筆時期と方法——	吉井亮雄	148-167

第8号(再創刊号, 1990年8月)	執筆者	頁数
Étude sur le traitement de la Bible dans les tragédies sacrées de Racine	Mitsuko YANAGI	1-33
L'idée des deux réalités chez Natalie Sarraute — la recherche de « la vie » —	Kyoko SAITO	34-38
L'idée du bonheur chez Rousseau	Yoshiro KURIHARA	39-46

与格の拡大用法と二重主題構文 ——統語構造と談話構造——	井 口 容 子	47-59
フランシス・ポンジュ試論 ——オブジェとの出会い——	飯 田 伸 二	60-76
『三つの物語』における色彩とことば	大 橋 絵 理	77-88
マラルメと音楽 ——初期作品における音楽の概念——	小 野 晶 子	89-98
アニーとクローディーヌ ——クローディーヌ・シリーズの2人のヒロイン——	小 野 晶 子	99-109
『放蕩息子の帰宅』における象徴と解釈の問題 ——エリック・マルティへの反論——	吉 井 亮 雄	110-132